

## 海外研修を終えて —日本と対比した教育の現状—

小瀬直人（教育学研究科）

今回 8 日間にわたる海外での研修を終えて、日本で日常的に生活しているだけでは得られない多くの貴重な経験をし、またたくさんの方のことを学びました。今回の研修では、主にグアム、チューク州の Weno 島、そして Piis 島の 3 つの地域を訪れました。それら各地域で学んだことなどについて述べていきます。

まず初めにグアムに到着しました。グアム空港から私たちが宿泊するホテルまでは、建物も多くあり発達していました。スーパーやレストランなどがありましたが、その多くが観光客用の店ばかりで、またベトナム料理やメキシコ料理、日本料理などグアムならではの店というものはほとんど見られませんでした。

その市街地から少し車を走らせ、島の海沿いを南に下ったところ、島の南東にリゾート地として有名なココスアイランドリゾートがありました。その道中は民家が点在していたり、山道であったりとほとんど開拓されていないのが現状でした。ココスから再び海沿いに進むと、チャモロ文化村がありました。ここは、グアムの先住民であるチャモロ人の生活ぶりを見学できました。塩の採集方法や、家屋や日用品の材料となる木の葉の利用の仕方などを体験的に学習することができ、現地の方から昔の話を聞くこともできました。

次に、グアム大学の教育学部を訪問し、日本出身の教授である井上先生とコンタクトを取ることができました。そこでは、グアムやミクロネシアにおける教育の現状であったり、日本との社会的な構造の差異や問題点など、日本の中にいるだけでは実感できない多くの内容について直に話を伺うことができました。最も印象的であったのは、やはり日本人は自己主張というものが弱く、自分の意見を発信していく力が乏しいということと、英語を活用する機会が少ないためか海外の国に比べて英語を話すのが不得手であるということです。現在の日本の教育では、読み書きの能力は非常に高いですが、子ども同士の意見の交流の場が少なく、結果として自分固有の考えを練る訓練がなされておらず、また自信がないので発表しないという状況にあると考えられます。そのため授業形態や働きかけの仕方に関しては、今後教員を目指すものとして海外から学ぶことは多いと思いました。

グアムの後は第二の目的地であるミクロネシア連邦チューク州の Weno 島を訪れました。ここはチューク州のメインの島であり、沈船のダイビングスポットとして有名で、私立の進学高校やホテル、スーパーなどもありました。しかし、空港と商店街をつなぐ島のメインの通りでさえ、でこぼこで荒れており、私たちが訪れた際も水が溜まり水没している部分もありました。スーパーには輸入品が多く、日本の製品も数多く販売されていました。個人の商店では魚や果物、果実を発酵させた地元の食べ物が並んでいました。

この島では、私立の進学高校を見学する予定でしたが、丁度島に着いた時期にその高校付近に住んでいる地位の高い方が亡くなったため、その地域に関係者しか入れませんでした。文化が違うとしてはいけないことも大きく変わってくるので、今回のケースのように、禁止地域への出入りなどを誤らないようにすべきだということを学びました。

また、ミクロネシアの観光局の方からお話を伺うことができ、日本とミクロネシアの歴史的な関係、ミクロネシアの観光について学ぶことができました。かつて日本が統治をしていたこともあり、人や物の名前に多くの日本語がまだ残っていることが納得できました。

そのほか、CWC という女性の地位向上を目指して活動を行っている団体で日本人ボランティアの方がおり、CWC の活動内容や日本との関わりについてお話を伺いました。

Weno 島に滞在した後は、Weno 島の北にある Piis 島という小さな島に向かいました。Piis 島は Weno 島よりボートで 1 時間かけて行くことができ、島内にはお店はなく、基本は Weno 島で買ってきたものと、島内に生えているパパイヤやヤシの実、その他育てている野菜や果物、漁によって獲れたものを食べて生活しているようでした。私も初めてココナッツジュースを頂いたのですが、爽やかで美味しく、喉を潤すだけでなく栄養補給もできるので、非常に生活する上で必要であると感じました。また、ヤシの実の可食部以外の部分や葉などはものを燃やすときの燃料としては最適であり、食べる以外にも利用できる万能な植物であるといえます。その他には、島にはパンの木というものがあり、その実のでんぷんを焼いたり蒸したりして食用としており、それを葉で包んで土中に埋めて発酵させた後に食べたりもしていました。発酵前の物はパサパサとしていて淡白な味でしたが、発酵後の物は酸味が少し強い食べ物となっていました。

Piis 島の島民はチューク語が主でしたが、中学生くらいの年齢になると、英語も話せるようになるようでした。島の中には小学校がありましたが、その日は先生が不在ということもあり休校となっており、教育活動がそこまで徹底されていない現状がうかがえました。何もない時間は、子どもたちは海辺で泳いだり、鬼ごっこをしていたり、生き生きと遊びまわっており、非常に元気に満ち溢れている印象を受けました。また、島では「ラミー」というトランプゲームがよく行われており、私たちも島民に混じってさせていただきましたが、大人だけでなく子どももルールを知っており、頻繁に家族や友人間で行われているように思いました。

Piis 島から 30 分ほど船で移動したところにある無人島で、ヤシガニ採集やシュノーケリングによる貝採集をしましたが、非常に海も澄んでいて、警戒心が薄いためかすぐ近くで魚を鑑賞することができました。自分たちの生活に必要な分を自然から頂くという自給自足の生活を肌で感じることができました。

今回の研修で最も強く思ったことは、今の日本の社会は、何でも揃っており、好きな時に好きなことができ、好きなものを手に入れられるという非常に贅沢な生活をし

ているということです。日本では 24 時間営業のコンビニはあるし、夜の生活でも明かりには困りません。しかし、そのように充実している地域ばかりでなく、今回訪れた Piis 島のように日本からすれば不便な現状の地域もたくさんあり、そこで生活することにより、今の日本の生活が便利であり幸せあるということが再認識でき、その一つ一つにありがたみを感じることができます。しかし、日本ほど発展していない地域の人々が決して幸せでないというわけではなく、むしろずっと生き生きしているように思えました。通信技術などが発展するあまり、人と人との直接的な関わりが激減している先進国は、人間としてのぬくもりが少し欠けてきているようにも感じました。日本で当たり前としていたあらゆることが、一步海外に出てそうではないと思えたこと、そして、人の温かさに触れられたことは本当に有意義であり、勉強になりました。

私は教員を目指していますが、もし教員になったら、この素晴らしい経験を伝えていき、一つ一つの物や周りの人々に感謝することを忘れない心情を育ていけるような教育活動を行っていきたいです。そのために、少しでも多くのことを経験し、様々なことに感動することのできる豊かな感受性を身につけたいと思いました。

最後に、今回この研修を組んで下さった山本先生、一緒に研修を受けたメンバー、そして研修先でお世話になった全ての方々に感謝申し上げます。



豪華にロブスター丸まる一匹食べました



Piis 島の子供たち



Piis 島の小学校（金曜日なのに休校）



碧い海をゆく